

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#002(半田) (2022/04/28 uploaded)

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#002(半田)(17:41)

<https://www.youtube.com/watch?v=maxMPIFx23A&t=3s>



武蔵野学院大学ニューソロジー研究所所長・半田広宣の挨拶

みなさん、こんにちは。ニューソロジー研究所の半田です。きょうは第1回目の研究動画の提出ということで、まあ何をテーマに話そうかなと思ったんですけど、最初から細かいことを話してもなんなのでね。今回は研究動画というよりも、そもそもニューソロジーとは一体どういう思想なのかということについて、哲学の文脈で少しアカデミックな解説を織り交ぜながらお話しさせてい頂きたいと思います。

(0:47-1:00/17:41)

**Research  
Announcements**  
#002

古代ギリシア哲学から見た  
ヌーソロジーの作業目的について



announcer 半田 広宣

古代ギリシア哲学から見たヌーソロジーの作業目的について

半田広宣

みなさんもお存知の通り、哲学というものは古代ギリシアに始まったと言われていています。イオニア自然哲学という言葉が聞かれたことをみなさんもおあわりだと思うんですが、まあその祖とも言われるタレスという人に始まって、その弟子のアナクシマンドロス、それから「万物は流転する」という言葉で有名なヘラクレイトス、さらには、火・地・風・水という四元素を世界の運動原理と見立てたエンペドクレスという人など、まあ実に錚々たる哲学者たちがまあ時期で言うと、ちょうど紀元前 6 世紀前後でしょうかね？ その時代のギリシアに突如として現れてきたわけです。まあヌーソロジーの頭に付いている「ヌース」という言葉も元々はこの時期に現れたアナクサゴラスという哲学者の言葉なんです。

では、このヌースとはどのような意味を持った言葉なのかということなんですが、これはギリシアの哲学者たちは「万物の始源」、始まりの源と書きますけども、「アルケー」とも言いますね。この問題についていろいろと思考をめぐらせていました。つまり、宇宙とは、宇宙の始まりとは、一体何だったのか？ 宇宙に始まりというものがあるとするなら、その初動の原理は一体どういうものなのだったのかということ。先ほど言ったタレスであれば。万物の始源は水です。有名ですよ。アナクシマンドロスはこの自然には始源などといったものは存在しておらず、それは無限であるとしました。まあここにはパルメニデスの「あるものはある」「ないものはない」という有名な思考が影響しているとは思いますが。で、この無限を意味する「アペイロン」という彼の言葉はとて有名です。エンペドクレスであれば、さっきも言ったように火・地・風・水といった四元素ということになるのでしょうか？ この火・地・風・水はその後の西洋神秘思想などにも取り込まれて、まあ現代のオカルトティストたちにと

っても、まあ必須タームとなっています。このように、それぞれがそれぞれの立場で、様々な説を展開したわけです。

ただこの中でも、アナクサゴラスという人が面白いのは、万物の始まりは「知性」だと言ったことです。この「知性」という言葉、英語で言うなら「インテリジェンス」ということになるかと思いますが、アナクサゴラスがこの知性という意味において「ヌース」という言葉を使いました。他の哲学者たちとは違って、自然の中に観念的な原理を導入しようとしたということになります。もっとも知性と言っても、アナクサゴラスの言う知性というのは現代に生きる私たちがイメージしているような知性とは少し違います。ちょっとわかりにくい表現になるかもしれませんが、自然自体に備わっている知性のことです。面白いですよね？ まあ当時のギリシア人の意識の中では、今の私たちが考えるように、人間とこ自然というのが分離していなかったと考えるといいと思います。そう考えれば、このアナクサゴラスがなぜ知性なんてものを、宇宙の始まりに持ってきたのか少しは理解できるかもしれません。

人間と自然の区別がなく、両者が一体となって活動しているところの自然。古代ギリシア人たちにとって、自然とはそのような存在だったと考えていいでしょう。こうした古代ギリシア的な自然は、一般には「フィシス」と呼ばれています。英語のフィジカルやフィジックスなどの語源にあたるものですね。このフィシスというこの意味合いは、ちょうど日本語で言う「自然」(じねん)というのと似ています。「自然」と書いて「じねん」とも読めるでしょ？ 自然薯とかあるじゃないですか？ あの土の匂いがプーンと漂ってくる普通の山芋よちも粘っこくて美味しいやつです。あの自然薯の自然(じねん)です。日本語の自然には、読んで字の如く、自らを然らしめるものという意味があります。昔の日本人は自然をそういうものとして捉えていたわけですね。自らが自らを然らしめる。これは古代のギリシア人たちも似ています。アナクサゴラスは、そのような自然の中に、自然が持つ知性というものを想定して自然自体が自らを内側から外側へとあたかも花を咲かせるかのようにしてその姿を内在する知性によって表現している。おそらくそのようなものとして自然をイメージしていたのだと思います。当然古代ギリシア人たちにとっては人間という存在もまたそのような自然の中の一つの表現だったということです。

いいですか？ これ、大事なところですよ。人間だけに知性が備わっているとか、そういう類の知性の話をしているわけではありません。アナクサゴラスのいう知性とは、自然の中にそのある調和的な秩序を生み出しているその大元の知性、そのような知性なんですね。繰り返して言いますが、決して私たちが普段考えているような知性のイメージではないということです。その意味では、現在ではこのヌースという言葉は「神的知性」とか「神の知性」もしくは「能動的知性」などといった呼ばれ方もしています。まあ科学者なんかがよく言うところの「サムシング・グレート」というやつですね。この大自然には人類には未だ未知の何か偉大な知性が宿っている。そういうイメージの知性です。ヌーソロジーというのは直訳すれば、このようなヌースに内在するロゴス、つまり、ヌースの論理といったよう

な意味ですから、このアナクサゴラスが考えたヌースという概念の背後に潜んでいる、その論理性を詳らかにして、21世紀というこの時代に見合った形で、なんとかそのヌースを人間の思考の中に復活させようとする、そんな思考の営みと言っていいかもしれません。

ただここでみなさんにちょっとした疑問が湧いてるかもしれません。というのも普通古代ギリシアの哲学者と言うと、ソクラテスやプラトン、アリストテレスといったビッグネームが真っ先に思い浮かぶはずだからです。アナクサゴラスなどといったマイナーな哲学者をどうして半田はそんなにフィーチャーするのかと疑問に思われることでしょう。わかります。でも、実はここには理由があるんです。その理由というのは、ヌーソロジーがハイデガーの哲学をある意味受け継いでいるからなんですね。ハイデガーはソクラテス以降の西洋哲学の歴史を「存在忘却の歴史」として徹底的に批判していました。ハイデガーのこの存在忘却という言葉の意味については、このヌーソロジー研究所の研究動画シリーズの中で、またいろいろと解説していくことになると思いますが、早い話、このアナクサゴラスと、いわゆる古代ギリシアの哲学者として一般によく知られているソクラテスやプラトンとの間には、思考する原理という意味において、実は目に見えない巨大な断層が入っているということなんです。ガバーツというふうにですね。それはわかりやすく言えばこういうことです。自然の一部として人間を見ているのか、もしくは、自然を対象のように思考してその思考する人間自体を自然から切り離して見ているのかという違いです。まあよりダイレクトに言えば、主体と客体が一致した哲学なのか、それとも、主体と客体が分離した哲学なのかという、その違いです。つまり、古代ギリシアの哲学というのは、アナクサゴラスとソクラテスの間にあるその決定的な亀裂のために、互いに全く違うものへと分かれてしまったということなんですね。まあここにはピタゴラスの存在なども関係しているのですが、きょうはそのことについては触れません。ただ今の時代はそのピタゴラス由来の数学的な認識が世界に対する見方を完全に支配していて、自然を単なる物質、もしくは、数量化させられたエネルギーとしてしか見てないでしょう？ まあ科学なんかはその役割を担っているわけですけどね。しかし、ピタゴラスやソクラテスが現れてくる以前の古代ギリシャにおいてはそうではなかったということです。自然はむしろ精神的霊的なものであって、人間と切り離された物質的自然のような観念は存在してはいなかった。そういうふうを考えていいと思います。アナクサゴラスは紀元前 500 年生まれとされています。一方、ソクラテスは紀元前 470 年頃の生まれです。ちょうど一世代ぐらいと言うのかな？ お父さんと息子ぐらい？ 30 歳ほど歳が違うわけですね。同じ古代ギリシアの哲学といっても、両者を絶対的に分け隔てている壁がこのアナクサゴラスとソクラテスの間にはある。そう考えるといいと思います。ではそれらがどういう違いなのか、もう少し具体的に話しておきましょう。

高橋研究員の研究動画にもあったように、ソクラテスは最初このアナクサゴラスが自然の説明にヌースという観念的な原理を導入したことにいたく喜んだと言われています。『自然について』というアナクサゴラスの著書があるんですが、それを真っ先に買い求めて読んだという逸話も残っているぐらいなんですね。まあ熱烈なファンだったんでしょう。しかし、本を読んでソクラテスは落胆を隠し得なかったという話も残されています。というのも、そこには肝心のヌースについて何一つ具体的なこ

とが書かれていなかったからです。そのせいかわかりませんが、ソクラテスの哲学はそこから自然というよりも人間の方へと関心が向かいます。どういうことかと言うと、みなさんもよくご存知のことでしょう。「善く生きる」とかまあ「よく」というのは「善」という字を書いて「善く」ですね。善く生きるとか悪法もまた法などといった、ソクラテスの有名な言葉がありますよね？ つまり、ソクラテスという人は自然界の秩序よりも人間社会にとっての正義や徳、そして、倫理、分別、そういったものを通して人間の生き方を説いた哲学者だったということなんです。人間として生きる私たち現代人にとっては、それはそれで哲学の重要な役割だと考える人がほとんどだと思います。しかし、先ほど来言ってきたフィシスの観点から見ると、それは全く違います。つまり、ソクラテス以降、古代ギリシアの哲学は、自然哲学というよりも善悪の判断や正しさを求める人間の哲学、つまり、主観性の哲学になったということなんです。考えたらすぐわかることですが、もともと自然には善も悪もありません。ましてや何が正しくて何が間違っているなどといった判断も自然はしませんよね？ その意味で、ソクラテスの哲学は人間中心の哲学になってしまい、もはや自然と人間が一体となったフィシスを語る自然哲学ではなくなってしまったということなんです。

ハイデガーは、このことに対して痛烈な批判を行うわけです。気持ちわかりますか？ 果たしてソクラテス以前の古代ギリシアの哲学者たちが思索していたようなフィシスの哲学を再び構築することができるのかどうか？ 現代というこの科学主義一辺倒の時代にそのような自然に対する新しい見方などといったものを生み出すことが可能なのかどうか？ フィシスの哲学を作る全く新しい知性をヌーソロジーは、アナクサゴラスが言ったヌースの中に直感して、その創造にチャレンジしていく思想だと考えて頂ければいいでしょう。つまりは、人間を超えた脱・人間の哲学を作るということ。そこにヌーソロジーの作業目的があると考えて頂ければ幸いです。

ということで、きょうはこの辺で終わらせて頂きます。またお会いしましょう。ありがとうございました。

(了) (17:17/17:41)

## References

### 参考文献

1. 日下部吉信『ギリシア哲学 30 講 人類の原初の思索から』(2018) 明石書店



武蔵野学院大学ニューソロジー研究所

(出典:【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#002(半田)

(2022/04/28 uploaded)

<https://www.youtube.com/watch?v=maxMPIFx23A>)